美丽卷

奇紅葉藏
紅葉全集
十子愛蔵版

明治三十七年七月十日印刷
明治三十七年七月十三日發行

著者　尾崎德太郎
發行者　大橋新太郎　東京市日本橋區本町三丁目八番地
印刷者　飯田三千太郎　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　株式會社秀英舍第一工場　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地

十千萬堂藏版

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

紅葉全集 卷之四

目次

隣の女……一
不言不語……一八一
鷹料理……三五九
三箇條……三七一
冷熱……三八七
　仝梗概……四五九
浮木丸……四八三
　（一）子おろし劑……四八三

紅葉全集

目次（三）

（二）天象道人……四八九
（三）旅商人……四九四
（四）星の化身……四九九
（五）光るもの……五〇四
（六）魚の餌食……五〇九
（七）河童の捨子……五一四
（八）誕生日……五一九
（九）御文函……五二五
（十）毒蛇の口……五二九
（十一）換玉……五三九
（十二）姫の婿……五四四
（十三）狂人てござる……五四七
（十四）手品の仕掛……五五一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

(十五) 命　乞……五九六
(十六) 第一の關……五五九
(十七) 蕃　椒……五六四
(十八) 舟の中……五七〇
(十九) 鏡　鯛……五七五
(二十) 大　女……五八〇
(廿一) 蟻の姿……五八四
(廿二) 二代の渡守……五八九
青　葡　萄……五九三
仝　自　序……七二八
八　重　襷……七二九
(一) 居間の上……七二九

目次（四）

居間の下……七五二
（二）その晩……七六五
（三）内談……七八〇
（四）珍客の上……七九四
仝　下……七九八
（五）客間……八〇六
（六）庭内……八一七
（七）念の爲の上……八二七
仝　下……八三四
（八）不機嫌の上……八五二
仝　下……八六一
（九）共ふさぎ……八七〇
（十）道端……八九九

（十一）舞もどりの上……九三一
仝　中……九四三
仝　下……九四八
（十二）判　然……九六〇

隣の女

（一）

淺草郵便局の爲換掛に粕壁譲といふのがゐた。二十八になるが配耦は無し、兩親は無し、厄介は無し、親類は無し、然も家まで無い。これが眞の獨身で、寺島村の植久といふ植木屋の奥座敷に下宿をしてゐた。生若い小官員の中には、鼻下に産毛を生してゐながら、三歳になる兒があるなどは珍らしからぬ例で、それといふのも、年老いた母親があつて、本人は小成に安

んじたい氣は無いのだが、親に奉じ、身を養ふ術の無いところから、壯心已まずと雖も五斗米の爲に膝を屈して、何も孝行と、神妙に極めてゐると、親の心は格別で、彼も道樂を始めない内にと、早速虫おさへの嫁を強ひられる。それには色々否といはれぬ事情が絡むで、是非に及ばず、一番その女房といふのを持つて見ると、有繋に情合で、憎くは無い。自分が稼人であつて、而して小使帳をつけて見せらるゝ細君なるものが出來た曉には、豈所帶染ざらむと欲すといへども得可けむやで、遠大の志は氣の脫けた風船球のやうになつて了ふし、名譽は欲しくもなくなるし、女房は可愛くなるし、子供は出來るし、老親は愚痴になるし、唯無上に欲しいのは金錢で、遂には、貯藏銀行の廣告に首を傾けて、一日一錢づゝ無いものにしておけば、月に三十錢の、年には三圓六十錢、十年で三十六圓だから、百年なれば三百六十圓、千年の三千六百圓、なるほど大きなものだ、と今更のやうに吃驚して、日に一錢づゝて三千六百圓は可い

が、能く考へて見て、千年といふのに二度吃驚して、それでは日に二錢としてと、また勘定を爲直すやうな根性にもなる。

嗚呼、おもへば青年の英雄で、所帶持の凡人と成下がらざるは蓋し鮮矣。天下に凡人は多いけれど、生れからの凡人よりも、青年からの凡人よりも、親の脛を咬つてゐた比の有爲多望の士なる今日の凡人が、其過半數を占めてゐるといつて可からう。故に女色が身を斫る斧ならば、所帶は體を摧く玄翁とも謂つべしである。

短袴弊衣に高屐を着けて、斑々たる霜鬢、四十にして未だ家を成さゞる的老書生を見れば、いゝ年をしてと、行違ふ人は眉を顰めるけれど、實際を謂つたら更に憐むべきは、二十三四の無分別盛で、親睦會の餘波を雷門で外しの、仲見世で喇叭や招猫を買つて歸る男の境涯であらう。

子は三界の首枷、其子の母は一生の絆、我標札をうつたる格子造の借家は、心を繫ぐ獄である。まて見れば、男子の蚤婚は自ら好むで瘁藥を飲

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

むやうなもの、島田髷の女房の爲には、日本國中で一日何千人の有爲の男子が愚弱々々になることかと想へば、御同然に懼るべきは虎皮より緋縮緬である。

袴を着けの紋附の羽織で、容貌頗る那勃翁に肖てゐる立派な男が、一生月二十圓ぐらゐに齷齪して、敢なく息は絶えにけりで、それでお仕舞は、少しく腑効無さ過ぎるけれど、什麼いふものか、何處の役所でも課長は一人で、下役は大勢ゐる。粕壁譲は年輩といひ、所得といひ、世間で謂ふ、天晴一人前の男であるのに、まだ女房は持たず、所帶には拘はず、然りとは、之を青年の月給取に比して、大いに頼もしく思はれる。定めて志を抱くが爲に身を愛むで、例の痺藥を飲まぬのであらうと推量される、天晴々々。と當事も無く褒めてばかりもゐられまい。實際心に期する所あつて、當分書生的の生活を甘んじてゐるの歟。但しは深く自ら晦して、私に哲理の研究に耽りつゝあるの歟。それとも、容色好みの（むづ

かしや)で、未だ佳耦を得ざるの歟。筒井筒、振分髪の聘定に死別れて、外に見かへる女子は無といふの歟。或は又づっと意氣筋で、實と誠の中の郷、折々御高祖頭巾が訪ねて來るといふやうな寸法歟。知らず粕壁讓の獨身は、善か惡か、邪か正か。まづ平素の行狀が詮議物である。近いことでもあるから、北廓の方は如何？　屢河を渉つて繰込むことであらうと想へば、なか〳〵以て道德堅固の甚しさは、植久夫婦が保證する。第一、局の同僚が、話せない奴だと除けものにしてゐるのが、何より確である。話せない奴だといふ一言の中には、吉原に限らず、總べて女の子に關係せぬ、といふ意味を含蓄してゐると解釋して差支あるまい。其實玉顏紅粉糎と摩違つても、曾て流眄をつかつたことの無い男である。況んや佇立の回顧の目送の茫然自失などゝいふ不見識に於てをや。菽麥を辨ぜずと謂ふのが、世智に昧いことの隱語なら、粕壁讓は銀杏返と唐人髷を辨ぜざるものである。

まづ如此色氣が無いから、定めて形にも風にも構ふことではあるまいと思へば、構ふといふ程では無いが、萬更構はぬでもない。勿論襦袢の袖に淺黄縮緬を附けたり、懸物の表裝見るやうな帶をするのでは無いけれど、いかにも清楚として、さも身嗜の好さゝうに見えるほど綺麗にしてゐる。譬へば花一つ咲かぬ杉の生垣が、刈込まれたばかりで雨に濡れたるかの如く。格別眺にはならぬけれど、見た眼に少しも否がない。けれども美服を着てゐるわけではない、數を持つてゐる次第でもない、始終同一ものを引張つて、保つだけは保たせて、是非入る時に新しいのを拵へるといつたやうな、極眞面目の道樂氣無しで、唯心して薄汚ないのや、汗臭いのなどを用ゐず。亂脈のない風躰が大の嫌ひと見えて、いつも出來立の押鮨の樣に、きちんと極つてゐる。

恐らく十六にして衣類を畳覺え、十七にして引熨を知り、十八にして仕立の寸法を書留め、十九廿にして、友切は仕舞つておくべきもの、と心

着いたのは此人であらう。

隣の女（七）

（二）

女色でも無し、衣類でも無し、旨い物食でもするのかと謂へば、さうでも無い。折々は鶏肉、牛肉、乃至は藪蕎麥、小料理屋などへ立入つて、獨酌を極めることはあれど、壹圓と統まつて、飲食に費つた例が寡い。それに又交際の無いといつたら、恐らく此男ほど交際の無いのも希らしい。何が日にも朋友の訪ねて來たこと無し。行つたこと無し。それでも正月には年賀の葉書が二三枚來る。それが先づ朋友であらうけれど、皆遠國に在るもので、何年にも姿を見せたことが無い。

是だから少しも錢は入らぬ。宿料の五圓といふものを月給から減いて、剩餘は幾許だか知らぬが、其は皆費つて可いものであるのに、道樂は無し、義理は入らぬから、半分は雜費としても、確に半分は手附かずに月を越しの、備荒貯蓄として毎月積立てられるに違無い。

尤も土曜日の晩には、折節淺草の寄席へ出掛けることがある。日曜には屹度貸本屋が入りこむ。まづ此二者が目に見えた出錢の口であるが、これしきでは高が知れてゐる。けれども、寄席とは、貸本とは、粕壁譲にして頗る異しむべき嗜好といはねばならぬ。その寄席といふのは、いかなる種類の藝か、貸本はどんな物を見てゐるのか、聞きたい。

例の十六にして衣類を疊むといふ人物であるから、總じて物事が綿密で始末な、生丁目な、綺麗好な。所帶を持つたら、始終格子を拭いたり、庭の草ばかり拵つてゐさうなと想はれる。その通り、居間をば畫割の如く形附けて、手爐に火箸の刺しどころまで、ちやんと極つてゐる。床間であれ、机の上であれ、戸棚の中でも、茶棚でも井然として、何が一個曲つて置いてあるものも無い。いかな自墮落の先生でも此一間へ入つたが最期、忽ち生丁目電氣を感染して、體が眞四角になつたやうな心地がして、我知らず肩が聳えて、割膝になつて、姑く恐縮して、遂に痺を切

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com